ポケットモンスター不思議のダンジョン　SPECIAL

虹星鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター不思議のダンジョン　ＳＰＥＣＩＡＬ

【Ｎコード】
Ｎ６２０９Ｖ

【作者名】
虹星鈴

【あらすじ】
交わるはずの無い世界が交わりあったとき、世界は――――
ポケットモンスター不思議のダンジョン×ポケットモンスターＳＰＥＣＩＡＬの世界で起こる様々な事件！
図鑑所有者は世界を救うことが出来るのか！？
これは技ではなく武器と魔法を使う不思議なポケモン世界で起こる物語・・！

プロローグ&キャラクターとか（前書き）

これはポケットモンスターＳＰＥＣＩＡＬの図鑑所有者達がポケモン不思議のダンジョンの世界へポケモンの姿となって行って冒険したりするファンタジー小説です。
ポケモンが本来使う技（電気ショックとか）を使わずに武器（剣とか）や魔法を使っちゃってる小説です。
ポケモンのイメージが大きく壊れたりする可能性があるのでそういうのが苦手な方は回れ右してお帰りください。
それでもいい方はどうぞお読みください。

プロローグ&キャラクターとか

昔・・・一つだった世界は二つに分かれた。
片割れの一つの世界は”人間”という生き物と”ポケモン”という生き物が共存する世界。
そしてもう一つの世界は・・・・”ポケモン”という生き物だけが存在する世界だった。
二つの世界は決して交わることもなく、やがて世界が二つあるということは誰もが忘れ去ったころ・・
一つの世界が危機に陥ったことでもう一つの世界のバランスが崩れ、その世界は崩壊を始めてしまったのだ。
ある”１３の選ばれた者達”は自分達の世界を救うため、もう一つの世界へと行く事になる・・・・
だがポケモンの世界はなぜか本来使うはずの”技”が使えなくなり代わりに”武器”や”魔法”を使う世界となっていた・・・！
ポケモンだけの世界で起こる様々な事件！戦い！
二つの世界をめぐる物語が今始まる・・！

＊キャラクター＊

＋レジェンド＋
シュコウ（朱光）　♂ピカチュウ
記憶喪失の朱色目ピカチュウ。背中に縦にはしった消えない傷が残っている。
様々な事件に凄い巻き込まれる。チーム「レジェンド」リーダー。

シソウ（紫草）　♀フシギダネ
シュコウを手当てしたりした紫目のフシギダネ。木の実の調合など

も得意。
武器は精霊紫星（セイレイシセイ）という名前のロッド。
おもに使うのは草属性。「レジェンド」副リーダー。

＊世界観とか＊

ポケモンが魔法や剣などの武器を使ってる世界です（笑）
１０年前から急に技が使えなくなり、変わりに魔法や武器が使えるようになったという設定です。
たとえば・・・２００３でポケモンがＲＰＧを思い浮かべていただくと助かります。
あれと同じような感じです。技名はもうちょっとシンプルだったり厨２病だったりしますが（汗）

プロローグ&キャラクターとか（後書き）

ここを使うのは初めてなのでよく分かりません・・・・・（汗）
いろいろ間違えた感がありますがよろしくお願いします。

［朱紫］１　出会いと冒険と［ハツノバトル］（前書き）

前回の話はよくサブタイの意味が分からなかったので「ポケダンＳＰＥＣＩＡＬ」にしてましたが・・・・前の話はプロローグです。本当にすいません；

［朱紫］１　出会いと冒険と［ハツノバトル］

＝どこか＝

「お・・達・・早く・・げろ！！」
「そ・・な・・・・さん・・！？」
「俺・あ・・つ・・足・・め・・・」

あたり一面様々な色がごちゃまぜにされたような空間の中、そこに１４の何かは居た。
その中の一つが黒色をしてもう一つに向かって走り出していった・・・途端。

黒色をした何かともう一つはその場に一瞬だけ強き光を残すとそこから消えていた。

「そ・・・な・・・」
「・・れ・・じゃ・・いとま・・追っ・・くる」

１２はまたどこかへと走り出した。

＝草原＝

「おーい・・起きてー」
（う・・・誰だ・・？）

ここは気持ちの良い風が吹き荒れる草原、
そこに一匹の傷だらけのピカチュウとそのピカチュウを手当し終えたフシギダネが居た。

「・・だ・・誰・・？」
「あ、起きた！良かったぁ！・・・君、傷だらけでここに倒れてたんだよ？」

体のあちこちに包帯を巻いたピカチュウは上半身だけ起き上がらせるとあたりを見渡した。
あたり一面何も無い原っぱである。風によって雑草もざわざわと音を出しながら揺れている。

「・・痛っ・・・！」

立ち上がろうとすると激痛が走り思わず座り込んでしまった。

「だ・・大丈夫？」
「痛い・・かな」
「家まで送ろうか？名前は？」

”名前”その言葉を聞いたとたんピカチュウの思考回路は停止した。
そしてすぐさま動き出す。自分の名前は何だっけ・・・そもそも・・・

何で自分はここに倒れていた？自分は今まで何をしていた？

「・・・分からない」
「え？・・・・まさか・・記憶喪失っていうものなの！？」

なぜかフシギダネのほうがピカチュウより取り乱していた。

「名前も覚えてないの！？」

「・・・あぁ」

しれっとした顔で答えたピカチュウにフシギダネはさらに困惑した表情を見せる。

「じゃあさ、君の瞳の色は朱色だからシュコウ（朱光）とかは？」

「・・・・まぁそれでいいけど」

「私はシソウ（紫草）、よろしくね！」

何でよろしくねといわれるのかは分からないピカチュウ・・改めシュコウだったが

まぁそれは軽く返事をしておいた。

「ところで手当て・・お前がしてくれたのか？」

「そうだよ？」

「ありがとな」

・・ついでに手当てのお礼も言っておいた。

「シィィィィィィソォォォォォォォウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁんんん！！！！！！」

「え、バタフリーさん！？ってぶつかりますよぉぉぉぉ！！？」

どがっという音とともにシソウとバタフリーは勢いよくぶつかった。

バタフリーはあわてて体制をなおすとシソウになにやら言ってきた。

「キャタピーちゃんが穴に落ちちゃった！！キャタピーちゃんが！！！」
「分かったから落ち着いて！！バタフリーさん！！！」
すさまじい同様っぷりを見せるバタフリーを必死になだめようとするシソウ。
シュコウはそれを見ながらのんびりと考えていた。
なぜだか自分はこの光景を見たことがある気がする・・と。

「と・・とりあえずキャタピーちゃんを助けてくればいいんだよね！？だから落ち着いて！！」
「キャタピーちゃんが居なくなったら私はぁぁぁぁぁ！！！！」
涙の水溜りを作っているバタフリーを遠い目で見つめたのちにシュコウは起き上がると（今まで寝てた体制でした）シソウの元まで歩いていった。

「まぁキャタピラを助けてくればいいんだろ？だったら行こうぜ」
「シュコウ、キャタピラじゃないよ。キャタピーだよ。そして君動けるの！？」
「何とか」
「じゃあ行こうか（あそこなら気性の荒いポケモンも居ないしバトルも無いよね・・・）」
シュコウはシソウについていく形でキャタピー捜索をすることとなった。
だがシソウの考えは外れることとなる。

＝小さな森＝

「ぜぇ・・っちょ・・・ポケモンが襲ってくるなんて聞いてな・・」

「ごめん！本当にごめん！！」

2匹は走っていた。もちろん出せるかぎりのスピードで。

後ろには血走った目をしているポケモン達の数々。

シソウは全力疾走しながらシュコウに謝っていた。

そんなことをしている間にも両者の幅はじわじわ縮まっていく。

そしてついにポケモン達がとびかかってきた。

「オワタァァァァァ！！！」

全力でそう叫ぶシュコウの前にシソウは立ち、

どこからか先のほうに紫色の楕円型の宝石がついた茶色いロッドを

取り出すと何かを唱えた。

「草木の精霊よ力を貸したまえ・・・木の葉の舞！」

木の葉の嵐が巻き起こりポケモン達を包み込む。

ポケモン達はたちまち目をまわし倒れた。

「・・・す・・凄い」

目をぱちくりさせるシュコウにシソウは振り向くと呟いた。

「・・・これでも修行してきたからね」

シソウが一瞬暗い顔をしていたのをシュコウは見逃さなかった・・

が、それについてはふれなかった。

「それにしても・・その持ってるのって何だ？」

「精霊紫星（セイレイシセイ）って名前のロッド。私と相性がいい武器はロッドだけだったんだー。」

「・・・武器？」

武器というポケモンがもつにはありえなさそうな言葉にシュコウは疑問を唱える。

「武器っていうのはね・・・あ、キャタピーを見つけてから話すよ」

確かにここでぺらぺら喋っていてもポケモンに襲われることだろう。

納得したシュコウはまたシソウと歩き出した。

［朱紫］１　出会いと冒険と［ハツノバトル］（後書き）

何やこのグダグダぁ！！！・・・この小説がどんな感じかはお分かりいただけたでしょうか。こんな感じで進むありえない設定です。

シソウ「何この言い訳コーナー、台無しだよね」

シュコウ「しかもシソウとシュコウって・・・名前似て（ｒｙ」

何でここにいるんだろうこのポケモン達・・・・

［朱紫］2　戦いと縄張り［イライカンリョウ］

その後、何とか奥地へたどり着いたシュコウとシソウだったが・・・

＝小さな森　奥地＝

「あ・・キャタピラってあれ？」

「だからキャタピーだって・・・・」

青色いもm・・・キャタピーを発見してシュコウとシソウはキャタピーに近づこうとした。

だがキャタピーが突如大声を発した。

「逃げてください！」

「「え」」

その途端周りにたくさんのポチエナが現れた。

ポチエナに囲まれるキャタピーにシュコウにシソウ。

「・・・シソウ・・俺戦えないんだけど・・・」

「そんなこと分かってるよ・・・でも一匹じゃきついんだけど・・・・」

苦い笑いを浮かべるシソウに汗を滝のように流すキャタピーに戦えないシュコウ。

・・・ここはひとまず・・・・

「穴抜けの玉！！！」

「持ってたのかよ!?」

シソウはどこからか穴抜けの玉を取り出すとそれをかざした。
シュコウのツッコミの声とともにシソウとシュコウとキャタピーはその場から脱出した・・・

【ッチ・・・逃したんだ・・・】

シソウ達が脱出した途端、真っ黒い体をしたピカチュウが現れた。
そのピカチュウは首に紫色のスカーフを巻き、目は血のようなアカイロだった。

【つくづく使えないね・・・やっぱり雑魚じゃダメか】

ピカチュウはポチエナ達を見ると黒い剣を取り出し、何かを呟いた。

【さて・・・使えない道具に用はないってボスからの命令なんでね・・・悪く思わないでくれよ?】

その瞬間、たくさん居たポチエナ達は一匹残らずその場から消え去っていた・・・

【ふう・・・やっぱり一筋縄じゃいかないか・・・・】

ピカチュウもそう呟くとどこかへと去っていった。

＝草原＝

「何とか脱出成功したね・・」

「持ってたなら最初っから使えばよかったのに・・」

座り込むシュコウにごめんごめんと謝るシソウ。

「キャタピーちゃん・・・」

「ごめんねママ・・・（僕ママがうざくて家出したんだ・・）」

バタフリーに抱かれているキャタピーの発言に
どこか黒いものを感じたのはきっとシュコウとシソウだけではない
はずである。

「ありがとうございました・・・！これはお礼です。」

「え？でも・・」

「お　気　に　な　さ　ら　ず　」

断ろうとしたシソウだったがバタフリーのあまりの迫力に押し負け、
お礼の３００ポケと木の実５個をもらった。

そして・・・

「ねぇシュコウさ。」

「何だ？」

ふいにシソウがシュコウに声をかけた。
シュコウはきょとんとした顔でシソウを見る。

「行くところがないなら・・私と救助隊にならない？」

「救助隊？」

ますますきょとんとするシュコウ。

「救助隊っていうのは、困ってるポケモンを助けたりする仕事をするポケモン達のことだよ」

「へぇ・・」

シュコウがだんだん感心を持ち始めたのを知ってか知らずかシソウはさらに話を続ける。

「私、ずっと救助隊にあこがれてるんだ・・・
だから・・・シュコウ、一緒に救助隊になってくれない？」

「うーん・・・まぁ行くところもないしいいけど・・・」

「やったぁ！！」

シュコウの言葉に飛び跳ねるシソウ。

そして早速シソウのあとを着いていこうとするシュコウだったがすぐに足をとめた。

「・・なんだろうあれ」

何かが光っているのを確認したシュコウは光っているもののところまで歩いていった。
そのあとをシソウも追いかけてくる。

「うわぁ・・そのペンダント綺麗だね！」

「・・・・・」

そこには赤いスカーフ、そして15色の丸い形をした石がついたペンダントがあった。

シュコウは黙ってそれを取ると赤いスカーフを首に巻き、ペンダントを首からかけた。

「似合ってるよ。じゃあ行こうか」

「・・あぁ」

そして草原から数分歩いたあと・・・

「ここが私達の基地だよ。」

「けっこう広いんだな・・・」

2階建てくらいはある家を前にしてシュコウはその家をいろいろと眺めていた。

「部屋は2階のあいてる部屋を勝手に選んでね。
じゃあ私は救助隊申請書申し込み届けだしてくるから」

そう言ってシソウは駆けて行った。

それを見送ったあとシュコウは自分の部屋を選びに行き、そのまま眠りについた・・・・

［朱紫］２　戦いと縄張り［イライカンリョウ］（後書き）

なぁにこのグダグダ。
シュコウ・シソウ「「これは酷い」」
失礼な気しかしない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6209v/

ポケットモンスター不思議のダンジョン　SPECIAL

2011年10月9日12時31分発行